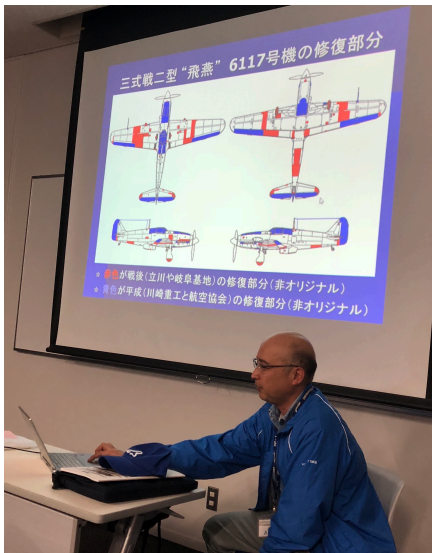


中部航空部会 12/1 月例会 かかみがはら航空宇宙博物館 飛燕解説講演

今回は川崎重工現役ボランティアスタッフによる飛燕の講演でした。

講師の小山澄人氏は、川崎重工でエンジン整備の生産技術者で、余暇に川崎重工航空機部門の歴史を調べ、休日には博物館のボランティアスタッフをしていらっしゃいます。

以下、講演要約：画像は、飛燕修復部位の経緯を説明する小山氏。



飛燕は倒立 V 型液冷エンジンで各務原で **3000** 機製造された。

当時ヨーロッパの高速機は液冷が主流で、空冷/星形エンジンより全面投影面積が小さいことが飛燕への採用の主な理由だった。

展示機は日本で唯一の飛燕で、終戦後の進駐軍による航空機破壊を免れた **3** 機の航空機の一つ。

エンジンは独 **Bf109** のダイムラー **DB601**(倒立 V 型) を国産化した **ハ-40** で、倒立 V 型は排気管が機体軸より下にでき、パイロット視界にも有利。

昭和 **16/12/12** キ **61-I** 型初飛行で **591Km/Hr** を達し、零戦の **530Km/Hr**、**Bf109E-7** をも上回った。

昭和 **18** 年に三式戦として制式採用され、ニューギニアに投入したが液冷エンジンの欠点を露呈。故障続出で稼働率は低かった。

その後調布 **244** 戦隊等で **B29** 迎撃機として本土防衛にあたる。

その後講演では、飛燕の戦中の生産/推移等が紹介された。

紆余曲折後、空冷エンジンの搭載型(五式戦)も昭和 **20** 年に採用され、液冷エンジンに比べて稼働率は向上した。 **400** 機弱生産。

戦後、**1** 機のみ保存され、米軍横田基地に展示、以後各地を転々とするうちに部品等の紛失が続き、知覧展示時にはほとんど形状を保つのみとなった。約 **30** 年知覧特攻記念館に展示。

川崎重工 **120** 周年イベントの目玉に飛燕展示の目論見案で返還を打診し、承諾受け。知覧と同等の保管/文化財扱いとして合意、**2015/9** に **71** 年ぶりの里帰りとなった。修復にあたり、戦後の展示ペイントを剥がすと元の機体番号等のマーキング跡が残っており、これを塗り潰さずペイントなし展示となった。

2016 年 **10** 月から **11** 月、川崎重工 **120** 周年イベント展示後、**2026** 年 **10** 月から **2017** 年 **10** 月まで、かかみがはら航空宇宙博物館の収蔵庫にて分解状態で展示、**2018** 年 **3** 月 **24** 日岐阜かかみがはら航空宇宙博物館リニューアルオープンで機体展示となった。

機体片側の胴体、主翼の日の丸はペイントではなくプロジェクションマッピングによる。博物館ショッピングストアには、「飛燕修復の記録」等の飛燕関連図書が置いてある。その他「インターネット航空雑誌ヒコーキ雲」、**Wikipedia** 等にも情報多数。